HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	変動期における青年の〈友人ネットワークー自己〉の連関に対する分析視角の検討（上）：高橋勇悦氏の「1.5次関数」論を手掛かりにして
Author(s)	小西, 二郎
Citation	北海道大學教育學部紀要, 79, 145-168
Issue Date	1999-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29598
Type	departmental bulletin paper
File Information	79_P145-168.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

変動期における青年の〈友人ネットワーク－自己〉の連関に対する分析視角の検討(上)

――高橋勇悦氏の「1.5次関係」論を手掛かりにして――

小　西　二　郎

A Study of a Method for Analyzing Relationship between Friend Networks and Selves of Adolescents in an Age of Transition

Tsugio KONISHI

1．はじめに

ここ数年来，青年による「援助交際」や暴力・窃盗，薬物使用等の「問題」行動や，所構わず座り込んだり，PHSや携帯電話でまるで自室にいるかの如く声高に話し込むといったような「自己中心的な」ふるまいが大人たちの耳目を集めている。大方の見解は，これらの現象は氷山の一角であって，その水面下では他者に対する配慮の欠如やモラルの崩壊が広範に広がっているとみなす。そしてそうした状況を，彼ら・彼女らの人間関係－自己のあり方の連関との関わりで次のように説明する。

彼ら・彼女らは「自己中心的」であるが，他者との関係がどうでもよいとは思っていない。それどころか，他者とのコミュニケーションの途絶に対する耐性が弱く，交友関係づくりに常に腐心している。そして気の合った友人とは付き合う。しかし，それ以外の人たちの存在を意識の上ではほとんど感じていない。だから，そうした人たちに対して無頓着で，配慮の必要性をほとんど感じない。ではその分，気の合った友人とは親密な付き合いをしているのかというとそうではなく，関係は希薄である。「重い」付き合いは，彼ら・彼女らにとって「うざったい」のである。彼ら・彼女らは，他者との関係を欲するが，親密さを避ける。ポケベルやPHS，携帯電話，更には電子メールのような非対面的で身体性を極小化したコミュニケーション方法がとられるのはそのためである。それ故，友人との間でも配慮はそれほどなされない。友人との関係の中での価値の交流や，それを起点とした規範の形成が行なわれることもあまりない。こうした，気の合った友人やそれ以外の人たちとのそれぞれのコミュニケーション状況からはモラル形成は望めない。モラルとは本来社会的なものだが，彼ら・彼女らにとってはそうではなく，マイ・モラルなのだ。そうした形容矛盾した見地からすると，大人には「自己中心的」だと受けとられる彼ら・彼女らの考えや行為も「正しい」ものとなるのである。

私も，他者に対する配慮の欠如やモラルの崩壊が少なからぬ青年にみられると解している。その点に関する上記の青年理解にも妥当する点があると考える。しかし，同時に疑問も感じる。果して，上記のような青年理解に一元化できるのだろうか，と。すなわち，どの青年も「自己中心的」であり，その人間関係は「気の合った」人たちとの「希薄な」関係なのだろうか。仮に，そ

うした側面を多数の青年が有しているとしても，どの青年でもそれは強いのだろうか。それに還元できない，人間関係と自己の連関の別様の側面が青年にはないのだろうか。こうした疑問に関する吟味が行なわれなければならないと考える。私がそう考えるのは，一連の調査でとらえたノン・エリート青年の実態との乖離を感じるからである。これらの調査は，北海道小樽市にある道立工業高校造船科を1992年に卒業した人たち（全員男性）を対象にしたもので，彼らが高校3年生の時と卒業してから数年後に実施した(1)。私は，この調査研究を通して，上で述べた疑問に関する考察を行ないたいと考えている。

彼らは家族や企業に包摂されてはいない。しかし，個々バラバラで孤立している訳でもない。彼らの多くが友人との付き合いを生活の中心に据えている。ほとんどが小樽で生まれ育ったため，中学以前からの友人関係が続いているのも珍しくない。小樽を離れた人たちも，転住地で新たな関係を築きつつ，小樽に留まっている友人たちとの関係も保っている。小樽の中学に通っている頃からの友人が高校卒業後札幌に転住しても交際を切ることなく継続し，その後，その友人の近隣に転住し，付き合いを重ねている者もいる。このように彼らは，重層的な友人関係を形成・維持・再形成し，その網の目の中で生きているのである。そうした彼らの友人関係がタイトな集団かというと，決してそうではない。そうした集団と比較すると，平等性が高く（組織性が高くなく），位置関係が曖昧かつ流動的であり，しかも関係の切り結びが比較的フレキシィブルに行なわれ，ともに過ごす相手や時・場所などに対する個々人の自由度が比較的大きい関係となっている。そうした関係において彼らは，友人と適度な距離を置きつつ適度に親密な付き合いをしているのである。

彼らは，友人たちと相互に「重くない」配慮をし合っている。では，彼らの関心が友人関係に限定されていて，それ以外の人には「自己中心的に」接しているのかというと，そうではない。例えば，多くの人が異口同音に自分の仕事をきちんとやり遂げることは当たり前だとし，「自己中心的に」ふるまう同僚や上司を手厳しく批判していた。自らの仕事をこなし，技能を向上させる努力を重ねつつ，自分のような後輩・部下を育てる先輩や上司を彼らは尊敬し，労働生活のモデルとしている。そして彼らは一様に，ノン・エリートとしての仕事や友人との生活を自らの生き方として承認し受け入れている。

この事例に関する分析については別稿に譲るとして，本稿ではそのための分析視角に関する基本的な考察を，パーソナル・ネットワーク論を手掛かりにして行なうことにする。パーソナル・ネットワーク論への注目は，人間関係変容を示唆する，上の事例における友人関係の有り様に導かれている。すなわち，上記の友人関係の有り様は，パーソナル・ネットワーク論が唱える人間関係に関する新たなパースペクティヴ，すなわち，従来のような個々人を求心化する集団としてではなく，個人中心的（ego-centric）で選択的なネットワークとしてとらえるパースペクティヴ（森岡（1993）（1995）（1998），玉野（1995），前田（1993）（1995））と符合するのである。

パーソナル・ネットワーク論は，青年における，社会変動に伴う人間関係と自己のあり方との相互規定的な変容に関して如何なる知見や示唆を与えてくれるのだろうか。パーソナル・ネットワーク論においては，パーソナル・ネットワークの構造的機能的特徴（形成の機縁，ネットワーク・サイズ，地理的分布，接触頻度，交際内容，サポート機能）や，それらと属性（性別，年齢，学歴，職業）や都市度との関連を量的に把握する研究が大半を占めている。しかし，それとは対照的に，人間関係変容と自己のあり方の変容の連関にまで論及している研究がほとんどないばかりか，そもそも人間関係が集団からパーソナル・ネットワークへとシフトしたのは日本社会の如

何なる社会変動とのどのような関わりによるのかということさえ満足に検討されていない(2)。しかしながら，そうした点について論じている研究は皆無ではない。高橋勇悦氏の「1.5次関係」論が，社会変動と青年の〈人間関係変容－自己のあり方の変容〉の連関との関係について論じている。以下，本稿では，氏の「1.5次関係」論を取り上げ，それを手掛かりにして考察する。

私が高橋氏の「1.5次関係」論を取り上げるのには積極的な理由がある。詳細は行論に譲るとして，ここでは高橋氏の所論における「1.5次関係」論の位置関係について確認する中で簡潔に述べておきたい。高橋氏は1960年代，人間生態学やワースのアーバニズム理論の検討を中心に行なっている。それを通して氏は，都市化は都市社会に限定された変化ではなく，都市的社会たる全体社会の変化，すなわち社会変動であり，しかもそれは，ワースの主張とは異なり，それぞれの社会によって個性的な軌道を辿り，その過程では対立や矛盾が惹起しているとみなさなければならないこと，そしてワースにおいては不充分だった都市化に関する社会学的考察を発展させねばならないことを論点として提出した(3)。

これらの論点を踏まえて高橋氏は，「あたかも日本の資本主義が特殊日本的な資本主義であるといえると同じように，特殊日本的な都市化」（高橋（1968b）p. 182）としてとらえる視角から，近代以降の日本における社会変動を家郷喪失の過程として理解する見解を1970年代以降発表する（例えば，高橋（1970b）（1970c）（1977）（1981）（1984））(4)。高橋氏によれば，農村住民のみならず出郷向都した都市住民にとっても農村が生活の拠点・精神的な拠点であった明治期（「身も心も故郷に」），そしてその後，帰村が困難になっても，都市住民にとって農村が依然精神的な拠点ではあり得た明治末・大正から1945年頃までの間（「心を故郷に，身を都に」），農村は家郷であり，それとは対照的に都市は出稼ぎや立身出世のための仮住まいの地と目された(5)。そのため，都市では，生活の場である家族や地域社会が軽視され続けた。

しかし，第二次世界大戦後，とりわけ高度経済成長期に入ってからの「都市と農村」の間の質的相違の消失（都市化社会（urbanizing society）の成立）と経済格差の拡大によって，離農・離村（場合によっては挙家離村や挙村離農）が相次ぎ，農村は心細く侘しいところとなってしまった。その結果，安寧で温和な家郷というイメージが崩壊し，農村は精神的拠点ですらなり得なくなった。すなわち，家郷は崩壊したのであり，都市住民は「身も心も都に」置かねばならなくなった(6)。

高橋氏によれば，都市化社会には社会的状況のみならず精神的状況さえも一元化し，しかも人々をバラバラにする側面があるという。しかし，そうした側面に抗し，新たな家郷の建設への志向性をもつ営みもまた人々によって試みられているとし，高橋氏は1970年代，二つの営みに注目するようになる。一つは，住民運動である。人々は今住んでいるところを生活の本拠とせざるを得なくなり，これまで軽視し，時に犠牲にしてきた都市の家族生活や地域生活を意識するようになった。そして，地域社会における生活環境の不備や悪化及びそれらが及ぼす家族生活への影響に直面し，それらに対処する中から住民運動を展開するようになった。こうした運動は，当該の問題に対する対処にとどまらず，更に新たな「地域社会」の形成，すなわちコミュニティ形成の方向へと展開した。そうした過程は，「都市化社会にみあう生活様式（way of life）」とは異なる「新しい生き方，すなわちライフ・スタイル（life style）の模索の表現」であり，「『生活』の価値の変革と創造という過程そのもの」（高橋（1977）pp. 192－193）であって，その中から新しい人間関係やルール，モラルが形成される可能性がある（高橋（1984）p. 65・p. 230，高橋（1981）pp. 213－217・pp. 222－223）。その意味で，「都市化社会における解体の傾向，すなわち，一種

のアノミックな社会的状況にたいする歯止めの役割を，コミュニティは担いうる」(高橋 (1975a) p. 53)。高橋氏はそうみる(7)。

いま一つの営みとして高橋氏は青年層における動向に焦点を当てる。氏の青年論はここを端緒とする。70年代，氏は，青年による仲間集団の形成に注視する。高度経済成長期以降，かつてとは異なり，もはや家族は「人間体験の場」たり得ず(8)，地域社会は「社会体験の場」たり得なくなった。これは「人間的・社会的原点」としての家郷を青年が予め喪失したことを意味する (高橋 (1973b) pp. 152－153，神島 (1971) p. 38)。しかし，青年は連帯的な関係の中でアイデンティティを形成しようとして仲間集団を求め，その軸線上にあるものとして，コミューンやコミュニティに関心を寄せる。それらは，「若者にとって〈原点〉としての意味をになうべきもの」，すなわち「〈新しいふるさと〉」に他ならない (高橋 (1973b) pp. 159－160)。だが，青年の意識と行動には，井上俊氏 (井上 (1971) (1972)) がいう「遊戯」の方向への離脱志向の側面があるため，原点志向が相対化に終始し，擬似的になりやすい (高橋 (1973b) (1974b))。このように青年の仲間集団には，アイデンティティ形成への希求を媒介にして原点回復 (共同性形成) へと展開する可能性とそれを阻む困難性の両面が存在すると高橋氏はみる(9)。

1980年代以降，高橋氏は，近代以降の社会変動・生活変動を「生活の社会化」「生活の個人化」(10)の進行ととらえ直して論じるようになる (例えば，高橋 (1981) (1982) (1984) (1985) (1987)，高橋 (1995) 所収の「都市社会的人間論」)。そして，それとの関わりで，70年代に引き続き80年代以降もコミュニティ形成と青年の人間関係について考察する。しかし，後者に対する見方を変える。すなわち，青年の人間関係においては共同性形成の可能性よりも困難性の方が強くなったとみるのである。その特徴をとらえる仮説として高橋氏は「1.5次関係」論を提起したのである。まず，生活の社会化・生活の個人化について確認し，その上で青年の1.5次関係について触れることにしよう。

高度経済成長期に入ると生活の社会化・生活の個人化が顕著となり，日本社会が都市化社会 (urbanizing society) として成立した1970年代において促進され，都市型社会 (urbanized society) となった1980年代に入るとより一層進行した (高橋 (1984) (1985))。それは，各種機関が主に商品として提供するモノやサービス，情報を人々が選択・購入し消費することによって個人単位の生活を送るという性格が強い生活様式，すなわち都市的生活様式の形成及びその浸透 (都市化) を意味する (高橋 (1985) pp. 25－26，高橋 (1992a) pp. 37－38，高橋 (1995) p. 314)。都市的生活様式は，私事化 (私化：privatization) の方向に価値づけられている (高橋 (1984) pp. 56－58・pp. 175－176・pp. 186－187)。従って，生活の社会化・生活の個人化は，「いわば一人主義的あるいは私主義 (ミーイズム) 的な生活を促進した (日本の個人主義)」(高橋 (1992a) p. 37)。

高橋氏によれば，こうした生活の社会化・生活の個人化の進行は，人々が個人を核として社会関係を取り結ぶ傾向を強めたという。つまり，人々が個人単位に広がる「いわゆるネットワークとよばれる生活網 (web of life)」(高橋 (1988a) p. 310) を形成するようになったというのである。人間関係もその例外ではなく，人々が「家単位や家族単位の人間関係もあって，それと重なるばあいがあるにしても，それとは相対的に独立している」「個人単位のネットワーク」(高橋 (1987) p. 7) を有する傾向が強くなったという。この高橋氏の主張は，人間関係のネットワーク化，すなわちパーソナル・ネットワークへの変容を意味するものと受けとってよいだろう。

1.5次関係論は，こうした人間関係変容を説明する仮説として位置付いていると考えられる。氏によれば，生活の社会化・生活の個人化の進行に伴って，人間関係は従来のような第1次集団

に見いだされる第1次関係ではなくなったという。かといって，第1次関係が衰退し，代わって第2次関係が優位になったわけでもないという。高橋氏は，人間関係が，第1次関係と第2次関係の中間の関係，あるいは両者の性質を有する関係，すなわち「1.5次関係」へと変容したとみる。そしてそれは，役割構造を弛緩させる。役割構造の弛緩は，個人レベルで分化している生活価値の対立・葛藤状態を許容し，ひいてはアノミー状況を促進させる。

高橋氏は，青年においてとりわけそうした傾向性が強いとし，それ故，共同性の形成は難しいとする。すなわち，青年においては人間関係がより希薄であり，しかもアノミー化の傾向が強いので，共同性感覚が一層弱化しているというのである。しかし，共同性形成の可能性が完全に閉ざされた訳ではないという。ネットワーキングに参加し活動することを媒介として，青年がコミュニティの共同性形成へと至る可能性があると氏は主張する。こうした関心は，青年の人間関係に関する研究などともに氏が最近積極的に取り組んでいる，高齢化社会におけるボランティア活動とそれを通したコミュニティ形成に関する研究と接合する（高橋（1989b）（1993b）（1994b）（1996））。

以上のように，高橋氏の所論は，(α)社会変動としての都市化と(β)都市化に伴うアノミーの進行と共同性形成の模索との相互浸透的矛盾の過程に関する理論的枠組みの構築と実態の解明を主軸としている。その中で青年論は(β)の研究の一つとして早くから論じられてきた。1.5次関係論はその系に属し，1980年代後半に提起され，以後論じられてきた。この論に注目するのはなぜか。1980年代（とりわけ後半）以降，ミーイズムと「人間関係の省略」が相乗的に進行し，多くの人々が価値観や行動様式の中に，冒頭で述べたような「自己中心的な」側面を，程度の差こそあれ有するようになった。青年ではその側面がとりわけ強く，端的な現象となって現れている。そうした事態は，日本社会においてアノミーが深く進行したことを物語る。それは社会の存立そのものを揺るがしかねない危機の深化を意味する。高橋氏の1.5次関係論は，そうした日本社会における共同性をめぐる今日的状況を鋭角的に示す局面として，人間関係としての1.5次関係と自己の連関を定位し，危機的状況だけでなくその克服の可能性について考察することを課題化している。すなわち，アノミーの進行を社会の危機として受けとめながら，同時にそれとの緊張関係のなかで共同性形成は如何にして可能かという問いを学的課題として引き受けている。私が氏の1.5次関係論に注目する所以である。

1.5次関係に関してこの間発表された論考は幾つかの覚え書きにとどまる。しかも，それらの間での論理の整合性が保障されているとは必ずしもいえない。その意味では，高橋氏においてもこの論は未だ試論の域を出ていないといえるだろう。しかし，それによって1.5次関係論の価値が減じるということはない。上で素描したことをみても，これから述べる行論をみてもそれは明らかである。試論の域にとどまっているということは，社会変動に伴う，人間関係変容と自己のあり方の変容の連関をとらえることが如何に困難であるかということを物語っているといっていい。その困難性を共有しつつ，本稿では(上)の2章・(1)において，覚え書きで示された1.5次関係論の論理の再構成を試みる。それを踏まえて(下)では，2章(2)で1.5次関係論の意義と問題点について検討する。そこでは，高度消費社会・情報化社会における〈人間関係－自己のあり方〉の連関に関する高橋氏の分析視角について考察することになる。その上で3章で，私が今後研究対象する，ノン・エリート青年の〈友人関係－自己のあり方〉の連関を分析する際の論点とそれに注目する今日的意味について考察する。

2．社会変動と青年の〈人間関係－自己〉の連関との関係について
――高橋勇悦氏の「1.5次関係」論の検討を通して

(1)「1.5次関係」論の論理構成

本節では，高橋勇悦氏の「1.5次関係」論の再構成を（青少年のそれを中心にして）試みる。青少年の1.5次関係論は時期的に大きく二つに区分できる。以下，①では，1980年代後半からバブル崩壊直後までの青少年の1.5次関係論についてみる（高橋（1987）（1988b）（1992b））。そこでは，大人の1.5次関係と比較することによって，青少年の1.5次関係の種差が明らかにされる。②では，世紀末における青少年の1.5次関係論についてみる（高橋（1998））。これら二つの青少年の1.5次関係は，大人の1.5次関係との相違性では共通しているものの，同時に両者の間には時代の推移に伴う差異性があることを高橋氏は示唆する。③ではその点についてみることにする。

① 1980年代後半からバブル崩壊直後までの青少年の1.5次関係

高橋氏によれば，1.5次関係には様々な存在形態があり，しかもプラスに評価できるものもあればマイナスに評価できるものもあるというように，その様相は多岐に渡るという（高橋（1988d）p. 11）。しかし，それらを大人－青少年という線で比較すると，明瞭な種差がみられることを氏は示唆する。1）では，プラスに評価し得る大人の〈サラサラ〉型の1.5次関係との比較を通して，マイナスに評価し得る青少年の1.5次関係の種差を浮き彫りにする。2）では，そうした種差が生じる社会的背景に関する高橋氏の考えについておさえる。そして3）では，青少年の1.5次関係の底流にあるとされる，親密性からの離脱傾向について考察する。

1）大人との比較でみた青少年の1.5次関係の種差

a）大人の〈サラサラ〉型の人間関係

先ず，高橋氏が肯定的に評価する大人の〈サラサラ〉型の人間関係についてみる。高橋氏は，奥田道大氏が板橋区調査で見いだした，「互いに干渉しない距離を保ちながらも無関心ではなく，友人感覚のつきあいや親しいひとをもっている隣人関係」（高橋（1988b）p. 14）は1.5次関係だとみる。まず，奥田氏の主張についてみよう。奥田氏によれば，都市型社会になる前までは，都市（urban）－農村（rural）軸を適用して「都市的孤独，プライバシーと農村的親密，共同」（奥田（1993）p.221）を両極として人間関係を把握することが可能であったが，都市型社会段階以降はそうした把握は有効性を失ったという。都市型社会とは「都市と農村」の質的相違が消失し，両者が一元化され終えた後の社会であるからで，そうした状況ではurban－rural軸ではなくurban－rustic軸を適用して“洗練されている・作法にかなっている－洗練されていない・野暮ったい”を両極とする人間関係把握が妥当であるという(11)。奥田氏は，この場合のurbanでは「相手のプライバシーを尊重しつつも，ほどほどの親密さ，結びつきを保つという状態が想定され」，それは「『ベタベタ』型でなければ『パサパサ』型でもない，『サラサラ』型と表現」（奥田（1993）p. 221）され得ると主張する。奥田氏において，板橋区の調査で見いだした隣人関係はこの「サラサラ」型の人間関係に他ならない。

それを受けて高橋氏は，人口の定着が基調となった都市型社会においては，「都市の生活文化の蓄積も認められ，したがって，それが人間関係に開花して〈サラサラ〉型が登場してくる」場合があり，それは「1.5次関係の一種と考えてもよさそう」（高橋（1992b）p. 118）だと主張する。

更に高橋氏は，そうした〈サラサラ〉型の人間関係の，住民活動への展開に注目し，次のように論じる（以下主に高橋（1988c）（1989a）参照）。1970年代後半になって，コミュニティ形成をめぐる住民活動は変化した(12)。すなわち，1970年代後半以降，当面の地域問題の解決を計ることにとどまらず，そうした個々の問題の有機的な関連を押さえつつ「まちづくり」という全体的な取り組みを行なう傾向を強めはじめた。しかも，物質的な環境や施設・機関の整備から人的な環境や関係の形成・向上へとその活動の主眼点が移行した。このような新しい住民活動の担い手やリーダーは青少年ではなく大人であり，とりわけ団塊世代や高齢者，女性，行政職員が積極的に参加するようになってきている。

交通機関やメディアの発達と人々によるそれらの利用・享受が1970年代以降，とりわけ80年代に入ってから，かつてないほど大規模かつ多様に進行しており，そのことが，人々の交流の拡大を促し，後述する地域性を越えた第１次関係的なネットワークの形成をも促進してきた。住民活動もそうしたネットワークと連関するようになり，組織もそうした状況に見合うようになった。すなわち，出入り自由で，任意の時・やり方による参加が可能な，リーダー・フォロワーの柔軟な役割交替がなされる，しかも一定の地域社会に必ずしもこだわらずに関係が広がっている，「やわらかい組織」である傾向が強くなってきた。しかも，リーダーには組織内部の関係だけでなく，他の集団などとのネットワークを取り結ぶネットワーカーとしての役割も求められるようになった（高橋（1988c）pp. 34－35・pp. 46－47）。

高橋氏は，こうした住民活動は新しい形の人間関係をつくり出すとし，その点に着目する。氏によれば，そうした人間関係も1.5次関係だという。そしてそれは，「ある一定の領域において，またある種の節度をもって（プライバシイを守るといったことも含まれる），しかも，同じ地域で生活しているあいだは積極的に人格的な接触（相互に助け合う友人関係など）も求める，そういった人間関係」（高橋（1988c）p. 48）であり，これも〈サラサラ〉型の人間関係だという。そうした人間関係は「新しい『生活のルール』といったものの胎動といってもいいし，新しい都市的生活様式の萌芽といってもいいだろう」とし，「これまでの住民活動の蓄積が都市化社会の成熟というかたちで発現してきた一つの証」（高橋（1988c）p. 48。高橋（1989a）p. 11も参照）ととらえる。

このように高橋氏は，奥田氏が見いだした隣人関係や住民活動において生み出される人間関係は互いに一定の距離を置いて過度に干渉せず，ある限られた領域において相互に親密な接触をする人間関係だとし，ともにプラスの評価が可能な1.5次関係だとみる。すなわち高橋氏は，両者ともに都市型社会における新しい都市的生活様式（ライフスタイル）だとして肯定的に評価するのである(13)。

b) 青少年の1.5次関係

一方，それとは対照的に，青少年の人間関係はその範囲が狭くしかも希薄な関係だと高橋氏はとらえ，マイナスに評価し得る1.5次関係だとする（高橋（1988b））。青少年の1.5次関係では，同一の人と人との関係であっても，時に第２次関係に近い「浅さ」が示されることがあるかと思えば，時に第１次関係を思わせる「深さ」が示されることもある。しかし，その「深さ」が相互に示されるとしても，それは関係の全般に渡るのではなく，ある一定の領域に限定される傾向が強い。つまり，同一の人と人との関係であっても，その質は第２次関係の方向に振れたり，第１次関係の方向に変化したりというように可変的・流動的であり，かつ第１次関係の方向に変化し

て相互に親密さが表明されるにしてもそれは一定の部分に限定されるのである。高橋氏はそこに,「一次的関係への志向をもつがこれに踏み込もうとせず,二次的関係を拒否しようとしながらも,これに依存しようとする」(高橋 (1988b) p. 9, 下線部筆者) 志向性を読み取る。すなわち,「他者と全くの疎遠となるのは避けたいが, かといって第1次関係に入り込むことにはためらいを覚える。時に他者との関わりをわずらわしく感じる時があるので, そのような時は距離を置きたい」という志向性が関与しているというのである。しかし, 氏によれば, そのような青少年であっても住民活動の担い手になって活動を展開して行く可能性もあるという(高橋(1988c)p. 51)。

2) 生活の社会化・個人化と青少年の1.5次関係の種差

a) 生活の社会化・個人化に伴う人間形成過程の変容

大人の〈サラサラ〉型の人間関係と青少年の1.5次関係の相違にはどういった社会的背景があるというのだろうか。高橋氏は, 両者の相違は単に加齢に伴う差異ではなく, むしろ社会変動が及ぼした影響の受け方の違いに起因するものととらえる。社会変動の影響は一様ではない。どのような生活史を経てきたのか, どの加齢段階にあるのかで社会変動による影響の受け方が異なってくる (藤村 (1999) pp. 103－106)。高橋氏によれば, 青少年は生まれた時から1.5次関係の中で成長してきたのに対して, 彼ら・彼女らの親及びそれより年長の大人は第1次関係の中で成長してきたという生活史上の相違が両者の1.5次関係の違いに関係しているという (高橋 (1988b) p. 15, 高橋 (1992a) pp. 37－38)。つまり, 大人の〈サラサラ〉型の人間関係と青少年の1.5次関係の相違は, 第1次関係を経験した上で形成された1.5次関係であるか否かの相違だという (高橋 (1988b) p. 15)。高橋氏は, 生活の社会化・個人化の進行に伴う人間形成過程の変容によって青少年は第1次関係を経験できなくなっており, しかもそのことが青少年の生活価値にも影を落としていると論じ, そのことが青少年の1.5次関係における特徴と関係していると考える。

第一に, 生活の社会化・個人化に伴う人間形成過程の変容が青少年に及ぼした影響について氏は次のように論じる (以下主に高橋 (1995) 所収の「都市社会的人間論」参照)。氏によれば, 生活の社会化・個人化は, 人間形成のエージェントとしての社会集団の系列を連続的なものから不連続なものへと変化させ, しかも人々の集団帰属・接触の多元化を招いたという。かつては, 各ライフステージ別にそれぞれ家族, 仲間集団, 近隣, 学校, 職場といった社会集団が人間形成のエージェントとして連続的な系列を成していた。しかし, 生活の社会化・個人化はこの系列にインパクトを与えた。先述のように, 生活の社会化・個人化の進行に伴って, 各種の専門機関が主に商品として提供するモノやサービス, 情報を個人単位に選択・購入し消費して個別的な生活を営むという傾向が強い生活様式 (都市的生活様式) が一般化した。この過程は, 反面, 家族や地域社会から相対的に離脱した生活を人々が営む側面を増大させる過程でもあって, 家族や地域社会の基礎的集団の機能の衰退を招来した (高橋 (1984) pp. 229－230も参照)。こうして, 人間形成のエージェントとしての社会集団の系列が不連続化した(14)。

しかも, 人々は, (弱化したとはいえ存続し一定の機能を果たしている) 家族や地域社会の基礎的集団, そして多様化してきた専門機関などへの多元的な集団帰属・接触を行なうようになった。高橋氏によれば, これらの社会集団の中でも, モノやサービス, 情報を提供する「専門機関は, これまでの家族, 学校, 地域社会よりも, はるかに強力に, 人間形成のエージェントとしての機能を果たす場合も, 珍しくなくなった。人間は, その社会的形成過程において, モノやサービスの市場とメディアの情報空間に日常的に直面せざるを得ない」(高橋 (1995) p. 315)。すな

わち，人間形成の過程において人々は商品化・消費化やメディアの影響を大きくかつ深く受けるようになったというのである（高橋（1987）pp. 11－18も参照)。

なかでも情報メディアは独自の仕方で関与するという。人間形成のエージェントとしての社会集団の系列が不連続化し，しかも人々はそれらの集団に多元的に帰属・接触するようになったとはいっても，全ての社会集団が人間形成の過程のどこででも作用する訳ではない。しかしながら，情報メディアは，それらの社会集団とは異なり，人間形成の過程のどの時点においても関与するという別格の位置にあるというのである（高橋（1995）pp. 316－318)。

こうして，高度経済成長期以降，生活の社会化・個人化の一層の進行によって，一方で家族や地域社会の基礎的集団における第1次関係が衰退し（すなわち「人間関係の省略」が進行し)，そのため人間形成過程におけるこれらの集団の影響力が低下し，他方で商品化・消費化が進行し，そしてとりわけメディアが及ぼす影響力が増大した。その結果，人間形成過程に節目がなくなった(15)。青少年にとって，こうした状況は生まれる前から続くいわば「当たり前」の事であり，それ故彼ら・彼女らは，第1次関係の経験の欠如による現実体験・生活体験の欠如，更には人間関係の変容についても何ら疑問を抱かずに受け入れている(16)。

そして第二に，そのことが青少年の生活価値にも影響を及ぼしていると高橋氏はみる（以下高橋（1984）pp. 141－161，高橋（1987）pp. 9－11，高橋（1988b）pp. 15－16参照)。氏によれば，価値の伝達・交流は，それが葛藤なく行なわれるにしても，あるいはそこで葛藤が生じるにしても人間形成にとって重要なのだが，「人間関係の省略」によってそれが危うくなったという。「人間関係の省略」によって，(α)役割構造が弛緩し曖昧なものとなり，伝達・交流するべき価値自体がぼやけてしまった。それは，ひいては大人－子どもの区別を曖昧にし，人間形成における発達段階や発達課題の意味の喪失につながる。しかも，(β)他者との交流の機会・場が限定され，それゆえ伝達・交流する価値も限定されることになった。こうして，「今日，人びとは，他人との接触を通じて，何らかの価値を吸収し，内面化する態度を，あまりもたなくなった」（高橋（1984）p. 160)。その結果，「社会的空白」が生じている。

この社会的空白を埋める働きをしているのが疑似環境，とりわけマス・メディアが関係しているそれだと高橋氏はみなす。確かに，疑似環境を選択し構成する余地や裁量は青少年にある。しかし，青少年は受け手である。つまり，青少年が「自由に」選択・構成できるといっても，それはあくまでも送り手によって予め提供されるということを前提とした上でのことである。「したがって，青少年が疑似環境に身をまかせる度合が強まれば，それだけ青少年の被操作性が高まるのである（高橋（1988b）pp. 15－16）(17)。

b）人間関係における〈2次〉化要因と〈1次〉化要因のせめぎ合い

上述のような，生活の社会化・個人化の進行によって第1次関係が衰退する（「人間関係の省略」が進行する）プロセスを高橋氏は人間関係レベルでどうとらえるのか。すなわち，生活の社会化・個人化は人間関係に対してどのように作用してきたのか，あるいは作用しているのか。そうした作用を人々はどう受けとめきたのか，あるいは受けとめているのか。なぜ「人間関係の省略」が進行しているのに第2次関係の優位化が起こらないのか。これらの点に関する高橋氏の考えについてみよう。高橋氏によれば，人間関係において第2次関係の方向に変容させようとする要因と第1次関係の方向に変容させようとする要因の両方が作用することによって，人間関係の1.5次関係への変容が起こってきたという。そして，そうした人間関係変容によって，とりわけ青少年

においてアノミーが進行しているという。以下,〈2次〉化要因と〈1次〉化要因のそれぞれの作用のせめぎ合いによる人間関係の1.5次関係化に関する高橋氏の論を確認し,続いて1.5次関係化に伴いアノミーが進行したとする氏の主張についてみる。

まず,人間関係が1.5次関係へと変容してきた経緯に関する氏の論についてみよう。第一に,人間関係を第2次関係の方向に変容させようとする要因とその作用を氏は次のようにとらえる。氏は,幾つかの要因の中でも生活の社会化・生活の個人化に注目する(高橋(1992b) p. 114)。生活の社会化・個人化の進行によって,人々が自らの私的関心や欲求を第一義的に追求する傾向(私化)が強まっており,そうした傾向は,他者に対する気遣いを弱化させ,相互交流を希薄化し,「人間関係の省略」を招いている(高橋(1985) pp. 25−26) (18)。他者にわずらわされずに,己の関心を優先的に追求したいという思いが我々の中に存在し,実際そうした生活を送ってきている。すなわち,そうした変化を生き,また望んでいる面がある(19)。しかも,生活の社会化・個人化は,そうした私的関心の追求を優先する生活を人々が送ることを可能にする条件を整えた。他者との関係に対する考慮よりも私的関心・欲求の充足の方を最優先の目的とする(ないしはそれに特化した)モノやサービス,情報を,しかも他者との直接的な接触を省略しても,人々が手に入れることを可能にしたのである(高橋(1984) p. 49,高橋(1987) p. 8)。人間関係を省略したところで日常生活を送るのに何ら支障はないという受けとめ方がそうした事態の進行を了承することに繋がっている(高橋(1984) p. 49・p. 150)。このように,人間関係が第2次関係の方向に変容しているからこそ,他者に気兼ねなく私的関心を追求できるのだし,私的関心の追求が強まるからこそ,人間関係は第2次関係の方向へ変容し「人間関係の省略」は進行する。両者は相乗的に進行している。

高橋氏は,生活の社会化・個人化による作用の中でもメディアの発達が及ぼす独自のインパクトに注目する(高橋(1988b) pp. 5 − 8・p. 10,高橋(1992b) pp. 114−115)。1980年代以降,マス・コミュニケーションやパーソナル・コミュニケーションの様々な機器がとりわけ青年層において個人単位に普及し,独自のコミュニケーション空間の形成を促進してきた。氏によれば,第一に,メディアの発達が人間形成のエージェントとしての社会集団の順序性を曖昧化することに関与し,よって「基礎的集団における人間関係のもつ意味を大きく変化させた」(高橋(1988b) p. 6)という。それは先述の通りである。

しかし,メディアのインパクトはそれに止まるものではなく,第二に,そうしたメディアの発達は間接的な人間関係を増大させ,加えて疑似環境の形成を促してきたという(高橋(1988b) pp. 5 − 8)。一つ目の間接的な人間関係は,非対面的で身体性が極小化しているということ,そしてコミュニケーションの切り換えに対する個々人の自由度が比較的高いということを特徴とする。しかも,その切り換えの判断基準は事の是非や当否ではなく,好悪である傾向が強い。よって,コミュニケーションの相手やその内容が嫌になったら,あるいは自分の「好み」と合わないと感じたら,直ぐにコミュニケーションを停止するということも行なわれるようになった。また,身体性を極小化しているので,電話相談や電子メールが端的なように「匿名の対話」も場合によっては可能となった。二つ目の疑似環境は,(α)送り手によって(場合によっては「現実」を越えて)操作される性格を強く持っている。(β)しかし,その反面,送り手によって設定された枠内ではあるものの,切り替えに対する受け手の側の自由度が高く,「快適な環境」として受け手が好きな時に好きなだけ「自由に」選択・設定できるようになっている。この場合の切り換えの判断基準も,事の是非や当否よりもむしろ好悪である傾向が強い。(α)・(β)いずれの側面も,疑似環境が「現

実」からかけ離れ，フィクショナルなものとなる傾向を強める。こうして，「自由に」選択できる「快い」間接的な人間関係や疑似環境が「人間関係の省略」を促進し，合わせてそこで生じる空白を埋めているのである。

加えて，生活の社会化・個人化が「青少年に対して，多様かつ流動的な社会的状況に対する多面的な適応を強いてきた」(高橋（1987）p. 10）面があると高橋氏はいう。氏によれば，青少年の4つの生活空間，すなわち家族，学校，地域，メディア空間のいずれの生活世界も多様化・流動化しており，青少年はそうした状況に適応せざるを得なくなっている。こうした状況下では，安定的かつ固定的な人間関係を取り結ぶことは難しいと高橋氏はいう。

このように，人間関係には第2次関係の方向に変容させようとする要因が作用している。高橋氏はそう認めた上で，しかし，だからといって，第1次関係的な要素が失われてしまい，第2次関係が優位となったのだとは必ずしもいえないとする。というのは，氏によれば，第1次関係の方向に変容させようとする作用もまた人間関係に働いているからである。第二に，その点についてみることにしよう。高橋氏は，生活の社会化・個人化の人間関係への関わりには，上記のような第2次関係化を促進する側面だけでなく，実は第1次関係の方向への変容を促進する側面もあるとして，次のように述べる。

「都市の交通やコミュニケーションの便宜性は，人びとの社会的な近接性を容易にし，『向こう三軒両隣』だけでなく，空間的に広がる，ネットワーク的な第一次的関係の形成も可能にする」(高橋（1992b）p. 115)。

つまり，地域性を越えた第1次関係的なネットワークを人々が形成・維持しあるいは再形成する際に，(生活の社会化・個人化の一環である）発達した交通機関やメディアが必要である場合が多いし，そもそも交通機関やメディアの人々による利用・享受が，そうしたネットワークの形成の契機となることも考えられるというのである。

そして更に，コミュニティ形成の住民活動にも，「地域の人びとの第一次的な接触や関係の形成・維持を助ける状況」(高橋（1992b）p. 115）が存在すると主張する。しかもこの住民活動は，上記の地域性を越えた第1次関係的なネットワークの形成とも連関しながら展開しているという（高橋（1988c）p. 34・p. 42・p. 47)。

以上は，人間関係を第1次関係の方向に変容させる契機をつくり出したり，あるいは手段となるような，いわば条件的な要因といっていいだろう。高橋氏はそのほかに，「あたかも第二次的関係の拡大に抵抗するかのような，いわば第一次的関係への内発的な一定の欲求」，すなわち人間関係の中で自分らしさを確認し生きる意味を見いだすことへの欲求があるとし，「とくに現代における『友人』のもつ意義は，まずはここに求められるように思われる」(高橋（1992b）p. 115）と主張する。

このように人間関係においては，第1次関係化の方向のベクトルと第2次関係化の方向のベクトルの二つが同時に存在し，せめぎ合っていると高橋氏はとらえる。よって，第1次関係と第2次関係のいずれかの概念で今日の人間関係を把握することは不可能だとし，「第一次接触と第二次接触の中間に位置するような関係，あるいは両者の特徴をあわせもつような関係が，いろいろと考えられる」(高橋（1992b）p. 117）と主張する。矛盾する作用が錯綜しており，そのため様々な存在形態が予想される，このような人間関係をとらえる概念として高橋氏は「1.5次関係」概念を提起したのである。

更に高橋氏は，1.5次関係とアノミーの進行との関係について言及する（以下主に高橋（1987）

pp. 9－11，高橋（1984）p. 51・pp. 146－161・pp. 168－172)。生活の個人化は生活価値の位相にまで及んでおり，そのため生活価値は個人単位に分化している。そのため，生活価値の対立・葛藤が個々人レベルで引き起こされている。そこに人間関係の1.5次関係化が関係する。人間関係の1.5次関係への変容には「人間関係の省略」が伴っている。それは役割構造を曖昧にする。そして，そうした役割構造の弛緩が「生活価値の対立や葛藤を許容」（高橋（1987）p. 11）してしまう。すなわち，個人単位に分化した生活価値が対立・葛藤したままで分立する（棲み分ける）という状況になるのである。こうした状況は，「家族，学校，地域およびメディア環境のそれぞれにおける，またこれらの全体における，社会的アノミー（social anomie）または社会的空白（social void）を，つまり，人びとが共通に認識し実現する社会的価値の解体ないし欠落を意味している」（高橋（1987）p. 11）[20]。

高橋氏によれば，アノミー化は，高度経済成長期後半以降の地域社会の解体（家郷喪失），そして1970年代以降の家族解体が進行するにつれて顕著になってきたという（高橋（1981）p. 25，高橋（1984）p. 172・pp. 229－230，高橋（1987）p. 11)。そして青少年の場合，生まれた時から，あるいは幼少年期から社会的アノミーの中にあり，そうした状況をいわば「普通のこと」として受けとめているという。それゆえ，社会的価値の共有の度合いが極めて小さいため，青少年の個別性感覚が非常に強いのに対して，共同性感覚の方はかなり希薄になっていることを高橋氏は示唆する[21]。換言すれば，「自己中心的な」生活価値を個々人が「尊重」し優先させようとする傾向が青少年ではとりわけ強いということを示唆しているのである。

3）小括

以上の，高橋氏による，大人の〈サラサラ〉型の人間関係と青少年の1.5次関係の対比が示唆することは何か。関係におけるわずらわしさを軽減するために他者と一定の距離を置くという点では両者は共通している。しかし，前者では他者に対する一定の配慮としての距離化であるのに対して，後者では他者と親密になるのを回避するための距離化と受けとれる。更にいえば，青少年の場合，関係における親密さの深化を回避するために，関係そのものまでも避ける傾向さえあるということも氏は示唆しているように思われる。大人の〈サラサラ〉型の人間関係では距離化や親密的接触の領域設定，親密的接触の内容が安定的であるのに対して，青少年の1.5次関係では同一の人との関係であっても，ある時は第１次関係の方に，またある時は第２次関係の方に振れるというように振幅が大きく流動的だとするのは，そのためではないか。しかしながら，高橋氏によれば，青少年はあらゆる関係と没交渉になっているわけではないという。彼ら・彼女らは，直接的な人間関係の省略によって生じた空白を，「自由に」選択できる間接的な関係やそうした関係などを駆使して手繰り寄せたモノや情報をもとにして構成した「快適な」疑似環境で埋めているのであり，その中で私的関心を追求しているとしている。

高橋氏は，第１次関係の経験があり，親密な関係での身の処し方を心得ている大人とは異なり，第１次関係未経験者である青少年は親密な関係の中で戸惑いを覚えているととらえているようである。そうだとしたら，何が惑わされるというのだろうか。その点ついて氏はどのようなことを示唆するのか。次の世紀末における青少年の1.5次関係についてみた上でそのことに触れることにしよう。

② 世紀末における青少年の1.5次関係

世紀末の今日，大都市の青少年において，家族や学校，地域，情報空間とは別の「第５の生活空間」において1.5次関係を形成し，そうした関係に帰属感を感じる傾向がより一層強まっており，それと相まって自己の多重人格性も顕著になってきたと高橋氏はみる（高橋（1998））。１）では，「第５の生活空間」への青少年の離脱傾向に関する氏の主張についてみる。そして２）では，そうした傾向のある青少年において自己の多重人格性が顕著になってきているとする氏の論理を追い，ネットワーク型住民活動への参加を媒介にして形成される人間関係には多重人格性を乗り越える可能性があるとする氏の考えについて解釈する。

１）「第５の生活空間」への青少年の離脱

高橋氏は，東京の青少年の「第５の生活空間」における1.5次関係に注目して次のように論じる（高橋(1998) pp. 138－140）[(22)]。第５の生活空間とは，家庭，学校，地域社会，情報空間（メディア空間）という従来の４つの生活空間の外側にあって，自然発生的な人間関係がつくられる生活空間のことで，場所が特定していないという特徴を持つ。ポケベルや携帯電話，電子メール，インターネットなどの情報通信技術の発達がそこでの人間関係の形成・維持に大きく関与している。

高橋氏は，第５の生活空間における人間関係とは，互いに見知らぬ者同士が，例えば伝言ダイヤルを通して知り合い付き合うといったような関係で，いわば「インティメイト・ストレインジャー」（親密な赤の他人）同士の関係を指すとして（高橋（1999)），その特徴について次のように述べる。それは，「既存の社会関係から離れた偶発的な関係であり，『本当の自分』（あるかどうか問題だが）ではない自分の演出する匿名的な関係であり，さらに，いつでも断絶できる流動的な関係」で，そこでは「旧来の生活空間における人間関係の固定感や閉塞感が忘れられ，互いに深入りせずに，快適な時間を過ごすことに主眼がおかれる」（高橋（1998）pp. 139－140)。そこには，今日の家族や学校，地域社会における「人格の深いところまでを共有する」人間関係に潜む，安心感とない交ぜになっている根深い不安感を回避しようとして，互いに一定の距離を置く傾向がある[(23)]。そして，少なからぬ青少年が安心できる場として，この第５の生活空間に対して，家族や学校よりも強い帰属感を感じている。

高橋氏は，人格の深いところを共有する関係に内在する「安心感と根深い不安感」を回避する，こうした第５の生活空間における人間関係も1.5次関係だとし，そこには「『選択嗜好』」（高橋（1998）p. 139）が存在するとみる。

２）青少年の1.5次関係とその多重人格性

更に高橋氏は，浅野智彦氏の論（浅野（1999））を手掛かりにして，上記の1.5次関係が多重人格性と関連していると論じる（高橋（1998））[(24)]。浅野氏は，東京都杉並区と神戸市の青少年を対象とした調査の結果から友人関係の３つのスタイルを見いだし，その中の多重人格性となじむスタイルに着目する[(25)]。この友人関係は，複数の自己を使い分ける傾向が強い人たちが取り結んでいる関係で，しかも複数の友人関係が重ならないように相互に隔離されているため，それぞれの関係での自己の使い分けがより一層スムーズにできるようになっている。ということは，こうした関係の中で人々は役割演技を繰り広げているのかというと必ずしもそうではなく，相手と熱中して話をする場合も比較的多い。すなわち，彼ら・彼女らにとって「『自分らしさ』はひとつの自己イメージによってはとらえきれないものであり，場面ごとに出てくるいくつもの自分の

どれもがそれぞれに自分らしいのである」(浅野 (1999) p. 46)。こうしたスタイルの友人関係を取り結ぶ傾向の強い人が全体の3分の1を占めている。

浅野氏によると,こうした人間関係と自己の有り様は親密性の変容をもたらしつつあるという。従来の親密な関係は,家族,夫婦,恋人などのような生活の広範な文脈を共有する,しかもそこからの離脱が比較的困難な「包括的な関係」(浅野 (1999) p. 49) であった。その中で生きていくには,自他ともに了解可能な唯一の「本当の私」をもつことが必要であった。そのため,自己の深部にある「本当の私」をどれだけ相手にみせるのか,そして互いに如何に共有し合うかで親密性をとらえる見方,すなわち,〈浅い－深い〉という尺度で親密性を秤量する図式が成り立っていた。そうした親密性のあり方を,浅野氏は〈包括的コミットメント〉と呼ぶ。

しかし,親密な関係は変容しつつある。すなわち,包括的な関係から,選択的・限定的に文脈を共有する,参入・離脱に対する個々人の自由度が高い関係へと変わりつつある。そして,「このような関係への変動と相伴って『唯一の本当の自分』という固定された消失点はしだいに溶け去り,いくつもの『私』,どれもそれなりに自分らしい複数の『私』へとほどかれていく」(浅野 (1999) p. 51)。これら一連の変化は,親密性の有り様をも変容させつつある。「本当の私」という消失点から「親密さにおける〈深い／浅い〉という『奥行き』」(浅野 (1999) p. 49) を計るという,親密性に関する従来の図式は,「消失点」の消失が進むことによって成り立たなくなりつつある。すなわち,「奥行き」をもたない親密性が広まっているのである。そうした親密性を浅野氏は〈選択的コミットメント〉と呼ぶ。

高橋氏は,浅野氏がいう包括的ではないが親密な関係・そこでの「選択的コミットメント」が先に述べた第5の生活空間における1.5次関係と重なるとみる。従って,第5の生活空間における1.5次関係には「本当の私」の空白化,すなわちアイデンティティの不形成・不在につながる傾向があるとする (高橋 (1998) p. 142)。ワース及び彼の流れをくむ第1次関係衰退－第2次関係優位化論では,多重人格性によるアイデンティティの不形成・不在は自己喪失の「病理」として理解される。しかしながら,高橋氏によれば,現代社会においてはそれはむしろ「適応」形態であって,「常態」となっているという[26]。すなわち,浅野氏がいう「選択的コミットメント」という親密性を特徴とする1.5次関係を承認するならば,「むしろ,『環節状化』したなかで『役割の切り換え』を行う人間関係がいわば『常態』であり,『適応』形態」(高橋 (1998) p. 143) となるというのである。そうなると「パーソナリティの分裂もなければ,自己の喪失の『病理』もない」ということになり,「したがってまた,今日しきりに言われるアイデンティティの確立 (自己同一化) の問題など,そもそも存在しえない」(高橋 (1998) p. 143) ということになる。

しかしながら,高橋氏は1.5次関係による多重人格性は克服すべき問題だとみなす。そして,「1.5次関係,多重人格がつながっていくようなネットワークとコミュニティの問題」(高橋 (1998) p. 144) に関心を向ける。すなわち氏は,1.5次関係には,ボランティアのようなネットワーク型の住民活動を媒介にしてコミュニティ形成へと連なる可能性があり[27],その過程で自己の多重人格性が乗り越えられる可能性があるとみているのである。氏によれば,このネットワーク型の住民活動は,「基本的には『住み良い』コミュニティをめざす活動でありながら,その地域社会をこえるネットワークで支えられている」(高橋 (1998) p. 145) という。そしてその関係は,「地縁」や「血縁」ではなく「志縁」,すなわち意志にもとづいて選択してつくられる関係 (選択縁) だという。高橋氏は,「そこにはコミュニティの新しい『共同性』(相互扶助的な活動) の

ありようが示唆されていると思われる」(高橋 (1998) p.145) と主張する。

私は，以上の高橋氏の考えを次のように解釈する。青少年のインフォーマルな1.5次関係には自己の多重人格化に繋がる傾向が強くある。しかしそのような青少年であっても，ネットワーク型住民活動のようなネットワーキングに参加して他者と出会い，接触する中で，ともに作り合う「志」を紐帯にしてつながって行き，多重人格性を乗り越える可能性がある。そうした人間関係もまた1.5次関係の一種である。そしてそこからコミュニティにおける共同性が作られてくる可能性がある。つまり，青少年の場合，インフォーマルな関係のままでは多重人格化する傾向を免れず，それを乗り越えるには，ネットワーキングでの接触・活動を媒介しなければならない。

③ 小括

高橋氏は，二つの時期における青少年の1.5次関係について論じる中で何を示唆しているのだろうか。高橋氏は，1980年代後半からバブル崩壊直後にかけての青少年も世紀末の青少年も，関係における親密さの深化を回避する傾向を有するという点では共通しているとみる。しかし，前者は，その余り，他者との直接的な関係そのものまでも避けてしまう傾向が強く，「自由に」選択できる「快適な」間接的人間関係や疑似環境に閉じこもり，その中で私的関心を追求する傾向が強いとする。こうした傾向を自己内閉型私化志向と呼び得るだろう。一方，後者は，他者との直接的な関係を避けるのではなく，むしろ積極的に形成しているという。親密さの深化を巧みに回避しながら関係を形成していると高橋氏はみているようである。しかし，だからといって，後者の青少年が前者ほど「自己中心的」ではないということはできず，他者との関係を駆使する形で私的関心を追求する傾向が強いと高橋氏はみているのではないかと考える。こうした傾向を関係利用型私化志向と呼び得るだろう。

前者の青少年の場合，直接的な人間関係を回避する傾向が強いのに対して，後者の青少年は逆にそうした関係を求める。なぜ両者は相違するのか。その点を高橋氏は次のようにとらえているのではないかと私は考える。ここで鍵になるのは「本当の私」である。「本当の私」が有るとすれば，他者と関係を結ぶには，深浅の差はあれ互いに「本当の私」を開示し合い共有しなければならない。しかしその場合，下手をすると親密性の「深み」にはまり，②1）でみた「安心感とない交ぜになっている根深い不安感」にさいなまれることにもなる。しかし，後者の世紀末の青少年の場合，「本当の私」に拘泥していない。彼ら・彼女らの場合，「本当の私」が空白になっており，その分だけ関係形成の負荷が小さくなっている。すなわち，「本当の私」を空白化しているので，親密性の「深み」にはまる危険が排除されるように予めなっているし，私的関心の赴くままに関係に「自由に」参入したり離脱することが可能となっているのである。文脈を重ね合わせ共有する関係形成ではなく，むしろ関係の切り換え (switching) を行なっているといってよいだろう。そして，状況に応じて他者と関係をもつ中でその空白に出現する自己を“その時の”「本当の私」として受け入れている。つまり，状況に応じて即応的に出現する当面の自己 (immediate self) を「本当の私」としているのである。このように，「本当の私」が前提的に存在するのではないとすることによって，柔軟かつ状況対応的・戦略的な関係形成と自己定立が可能となっているのである。この文脈で考えると，前者の1980年代後半からバブル崩壊直後にかけての青少年は「本当の私」に拘泥していたということになると思われる。他者との関係の中では「本当の私」を開示し共有し合わなければならないと彼ら・彼女らは考えた。しかし，第1次関係を経験したことのない彼ら・彼女らは親密性の「深み」を目の前にしてどうしてよいかわから

ず，結局は「本当の私」が他者に翻弄されてしまうと考え，戸惑いを覚えた。高橋氏はそう示唆しているのではないか。

以上のように，高橋氏の「1.5次関係」概念は人間関係の複雑な内実をとらえる概念となっており，それと照応して自己のあり方のヴァリエーションに関する考察を可能にしている。従来，都市的人間関係論では，ワースらによる第2次関係優位化論（第1次関係衰退論）とアクセルロッドらによる第1次関係存続・再生論の二つが有力な説として存在してきた（Wirth（1938＝1965），Axelrod（1956＝1978））。両者は，第1次関係の存否をめぐってベクトルの向きが逆行しているものの，〈第1次関係－第2次関係〉の二分法を前提としている点では共通している。それに対して高橋氏は，こうした二分法では人間関係変容をとらえることができないとして，「1.5次関係」概念を打ち出した。すなわち，従来の二つの説のようなデジタル的関係理解では限界があるとして，氏は「1.5次関係」概念によるアナログ的関係理解を提起したのである。

次節では，そうした「1.5次関係」論における分析視角について考察する。まず，先にみたように，〈人間関係－自己のあり方〉の連関において「『本当の私』をどう定立するか」という問いが媒介になっているとする高橋氏の見方について検討する。その上で，青少年の1.5次関係におけるマイナス面を乗り越える方途ついて考察する。高橋氏は，自己内閉型私化志向の青少年と関係利用型私化志向の青少年のマイナス面，すなわち，私化によるアノミーの進行や自己内閉あるいは多重人格性というマイナス面を指摘するだけでなく，それを乗り越える方途を探り，両方の青少年の場合，ともにネットワーキングへの参加を媒介にしてコミュニティの共同性形成を志向する中でマイナス面が乗り越えられる可能性があるとしている。しかし，私は，青少年のインフォーマルな1.5次関係における共同性形成への営みに注目したいと考えている。今日，共同性形成を「コミュニティ」のそれとして定位することには一つの陥穽があると考えており，また青少年のインフォーマルな1.5次関係自体に上述のマイナス面を乗り越える可能性があると考えているからである。そうしたインフォーマルな1.5次関係のとらえなおしを試みる際，高橋氏が提起するアナログ的関係理解が鍵となる。

〈注〉

(1) 私は，①1991年11月に，北海道小樽市にある道立工業高校造船科3年の1クラスを対象にした調査を，そして②95年8月から96年2月にかけて追跡調査をそれぞれ行なった。いずれも，学校・労働・生活実態と友人関係に関する調査であった。①の調査では調査票を用いた面接調査を行ない，38名（全員男性）の方々にお話をうかがった（所要時間は1時間強）。②の追跡調査では，調査票を用いた面接調査（テープレコーダー使用）と郵送によるアンケート調査を行なった。前者の調査では18名（小樽在住12名，札幌在住4名，室蘭在住1名，道外在住1名）の方々にお話をうかがい（所要時間は2～3時間），後者のアンケート調査では3名の方々が回答を寄せて下さった（そのうち1名の方については母親にお会いし，面接による補足調査を行なった）。

(2) 以下であげる，森岡清志・玉野和志両氏の指摘はこの点と関係していると解釈できるだろう。森岡清志氏は，パーソナル・ネットワーク論における現状の研究は「諸個人が相互につくりあうネットワーク」の中に「既成体としての社会の個人に対する規定力と，ネットワーク形成を通して個人が社会を規定しなおす規定力との交錯しあう関係が存在することを重視する」視角を失い，「対象者個人の親しい人びとによって構成されるミクロなネットワークに分析視野を限定させ，一方，このミクロなネットワークに対する都市度の効果に分析関心を特化させている」（森岡（1998）p. 208）と述べている。

玉野和志氏は，「都市化や産業化が進むにつれて，これまで人びとの行動を強く規制してきた基礎的な集団の拘束力が弱まり，諸個人の自由な選択とそこに表現される主体性が把握されるべき対象となった」状況において，「個人が単位となってさまざまな形態で生成された社会関係のあり様に着目するネットワーク論の視点」は，「個人の主体性と社会構造を結ぶ新たな分析の地平」（玉野（1995）p. 21）を拓くものと当初期待されたとする。「しかしながら，その後のネットワーク論の展開は，構造的側面に還元しえない諸個人の生活局面を強調したがゆえに，かえって構造的脈絡との関連にはあまり関心を示さないという傾向を助長することにな」り，そのため弱化した基礎的な集団の拘束力とは異なる，個人を規制する新たな「構造的な力」が作用する側面を見逃していると批判する（玉野（1995）p. 21）。

以上のように，森岡・玉野両氏はともに，パーソナル・ネットワークを媒介にした社会と個人の相互規定的連関に関する問題意識がパーソナル・ネットワーク論において希薄になっているとみる。社会変動との関わりや自己のあり方との連関に関する考察がパーソナル・ネットワーク論では脆弱なものとなっているのはこうした学的状況のためだと私は考える。

(3) 高橋氏によれば，ワースがアーバニズム解明のための三重図式（生態学的視角，「社会組織の研究」の視角＝組織論的視角，社会心理学的視角）を構築し，「社会組織の研究」と社会心理学を課題化することによって都市社会学的研究に道を拓いた点は評価できるものの，彼のアーバニズム理論に，人口量や人口密度，異質性といった人口要素によって規定される『『都市』が自生的・自動的実在としての独立変数でありアーバニズムはその単なる従属変数である」とする「人口史観的傾向が認められる」（高橋（1968a）p. 140）点が問題だという。それゆえ，第一に，ワースにおいては「都市」だけでなくアーバニズムやアーバニゼイション（すなわち都市化）も超体制的・超歴史的・超文化的仮説になっており（高橋（1968a）pp. 140－141），第二に，「社会組織」が人口の三要素によって規定される「都市」に規定されるものとされているため，「社会組織の研究」が粗雑になってしまっているという（主として高橋（1968a）pp. 140－141参照。他に高橋（1965）p. 53も参照）。

それに対して高橋氏は，「都市はすぐれて歴史的・個別的存在であり，経済的・政治的条件によって強い制約を受ける」（高橋（1968a）p. 140）のであって，それ故，アーバニズムもまた歴史的体制の制約や地域的影響を受けており（高橋（1968b）p. 177），従って「都市化は国や地域の別によってさまざまの形態をとり決して一元的ではない」のであって，その解明のためには「個別的分析視角」（高橋（1965）p. 55）をとらなければならないとする。そして，ワースがいう「社会組織」（社会的相互作用，社会関係，社会制度，社会階級，社会集団など）の変化こそが社会変動の中核として把握されねばならないと主張する（高橋（1965）pp. 53－54，高橋（1968b）p. 172）。他に高橋（1968a）pp. 172－173，高橋（1970a）pp. 67－68も参照。

(4) 以下で概観する，1970年代から今日までの社会変動・改変に関する高橋氏の所論は全て，社会構造・生活構造・意識構造の変化としてとらえる見方から立論されたものである。社会構造と生活構造の関係について氏は次のように述べる。初期アメリカ都市社会学は，個人生活を分析の出発点としているものの，社会は個人（の生活）の積分だとする方法論的個人主義の立場に立ち，社会の研究の方に力点を置いているために，ワースの都市的社会関係論が端的なように「個人の集団や成層との関係の仕方の多様性，つまりは生活構造の多様性」（高橋（1973a）p. 193）を見落としている。近代以降，産業化・都市化の進行によって社会構造と（個人の）生活構造は分化してきた。両者はそれぞれ独自の論理をもっており（それ故個人の生活構造の集積イコール社会構造ではない），従って生活構造（そしてその一部としての社会関係）は，社会構造と密接に連関するものであると同時に相対的に独自なものとして把握されねばならない（こうした高橋氏の指摘については，大谷（1995）pp. 55－56も参照）。

そして氏は，生活構造を媒介にして社会構造と意識構造とが相互規定的に関連しているとする。「社会構造は生活構造を媒介して意識構造に投射され」，そこで様々な「反応の諸形態」が形成される（高橋（1975c）p.

99)。「社会構造の変容に『先行』する意識構造の変容は，その反応の一形態と考えてよいであろう」(高橋(1975c) p. 99)。また，社会構造の要素としての「成層や集団の多元化は生活構造を媒介して，結局は意識構造に投射される」として，都市化社会では「意識構造の多元化」が生じている（高橋（1975c）p. 100）という。他に高橋（1971）も参照。

(5) 明治末・大正以降，都市からの帰村者を受け入れる余裕を農村は失いつつあった。とりわけ，大恐慌以後の「窮乏する農村」では特にそうであった（しかし，失業や病気，災害などの危機に直面した際，都市住民は帰村を求め，農村もなんとか受け入れた（高橋（1977））。高橋氏によると，家郷を離れて都会にあることの孤独感，たよりなくもはかなく，むなしい「根なし草」としての己れの境遇に付きまとう無常感と漂泊感，そうした心情と「思郷のこころ」とが都市住民の心の中で分かちがたく結びついていたという。そして，都市住民の中で「空間的にも時間的にも距離化された故郷のイメージは鮮明さを増してゆく。故郷のイメージをいだいて，またそれを心の軸にして，かれらは都市生活をつづけるのである」（高橋（1970b）p. 59)。その意味では，農村は依然として精神的な拠点ではあったのである。それに対して都市は，少なくとも精神的にはやはり「旅先」であり，一時的な滞留の場であった。このように，高橋氏によれば，明治末・大正以前と以後とでは帰村ルートが安定的に確保されていたか否かの違いがあるが，都市住民にとって農村が少なくとも精神的な拠点であり，それとは対照的に都市は所詮仮住まいの地と目されていたという点では相違なかった（高橋（1970b）p. 69，高橋（1977）pp. 183－184)。

(6) 戦後，とりわけ高度経済成長期以降の大規模かつ急激な離村向都（都市部における過密・農村部における過疎）の裏には，農村への商品経済の一層の浸透や行政の一元化，マス・メディアや交通機関の発達等による村落共同体の解体と，商品経済が一元的尺度としてより一層強く機能することによって引き起こされた都市と農村の間の経済格差の拡大があった（高橋（1970b）（1970c))。

(7) 高橋氏は，コミュニティは地域性と共同性を包含していなければならないとする。そして，異質な人々が集住する都市において，個々人によって異なる生活空間と意識空間を横に貫く共通領域として地域性と共同性をとらえるとすると部分的・限定的にならざるを得ないとする。つまり，「コミュニティというのは，都市化社会において居住地にかかわるかぎりでの一定の地域的なひろがりをもつ社会的接触ないしは社会的活動」であって，「社会生活の一部でしかない」という（高橋（1972）pp. 122－123)。そう認めた上で，しかし「都市化社会のなかのコミュニティは，そのかぎりにおいて，都市化社会の統合的役割を果たす可能性をもっている」（同上書，p. 123）とみなし，コミュニティ形成を重視する。

(8) 高橋氏によれば，「『親子の断絶』とは寛容的・保護的な親と『自由』に成長してきた子との生温かい情緒的関係から生じているといっていい。若者からみれば，もはやこれは擬制の世界であり，荒涼たる世界である。都市化社会に沈みこんでいる底点である」（高橋（1974b）p. 58)。松原治郎氏も同様の指摘をしている。「親子や夫婦が，多面的な生活機能や役割において結びつき合うのではなく，それらを家族外に吐出させてしまって，ただ無内容な情緒的からみつきだけに頼ろうとする。家族集団のもつ生活の目標とは何か，生活の全面にわたっての家族や地域社会の統合とは何かなどが問われなくなってしまう。まして人間的・内面的な価値の水準維持や向上をはかるといった生活態度は，ますますかえりみられることが少なくなる」(松原（1971）p. 127)。

(9) 宮島喬氏も，高橋（1973b）に触れて，「都市化社会における故郷喪失，コミュニティ不在，核家族化，消費的享楽の誘惑などは，若者の『自立』への欲求を『原点不在』のなかで空転させてもいるようである」とし，この論文から若者文化の「アンビヴァレントな姿を認識しておくこと」（宮島編（1980）p. 212）を促し，その上で「『原点喪失』の状態を呈しているかれらの文化が，はたして将来現実的意味をおびて，人びとの感性や行動様式を変えていくという可能性がないかどうか」（同上書，p. 25，傍点原文）を考えなければならないとしている。

(10) 生活の個人化とは，「人びとが一人ひとり，個人単位の生活を送る傾向」（高橋（1984）p. 172）を意味する。それは，個々人がそれぞれの生活の中でそれぞれの関心を追求するということであり，「自立」と「孤独・孤立」の二つの側面をもっており，いずれにせよ，相互交流の希薄化をもたらす（高橋（1985）pp. 25－26）。そして，生活価値を個人単位に分化させる（高橋（1987）p. 10）。

一方，生活の社会化とは，「人びとの生活が家庭の外部の施設や機関に依存する傾向」（高橋（1984）p. 58）を意味する（これは，家族の諸機能の外部化（社会化）とも連動している。その点については高橋（1975b）pp. 21－28，高橋（1984）p. 63・p. 174，高橋（1995）p. 313を参照）。家族外の機関が提供するモノやサービス，情報の使用を通して人々が生活を成り立たせる傾向が，とりわけ高度経済成長期から強くなった。これらのモノやサービス，情報は多様な商品として販売される場合が多い。従って，生活の社会化は，換言すれば「生活要求（needs）を，専門機関に依頼し，財（主として貨幣）の消費によって，充足する」傾向を意味する（高橋（1987）p. 6。高橋（1984）p. 60も参照）。

(11) この点について奥田氏は，大森彌氏の論に依拠している。大森（1983）参照。

(12) 高橋氏においては，「『住民活動』は住民の実行をともなった何らかの実際の行動をいい，そのうち住民の主体的な思考に裏打ちされた活動をとくに『住民運動』という」（高橋（1988c）p. 35）としていることから明らかなように，住民活動が住民運動の上位概念となっている。

(13) 別の論文でも高橋氏は，人間関係に着目する理由についてここでの主張と重なることを述べている。すなわち氏は，人間関係は「地域社会の実体をなすもので，地域生活の『豊かさ』を考えるのであれば，すべてはここに帰着するといっても過言ではない」とみなしており，その点について考察するために「1.5次関係など，問題をはらむ言葉を使ったが，ここらあたりに注目しつつ，『豊かさ』の源泉となる人間関係の展開を考えたい」（高橋（1988d）p. 13）としているのである。

(14) 高橋氏によれば，「今日では，家庭，学校，地域社会が集団単位で分化し，しかも，それらの集団自身が分化（解体）した状況に置かれている」（高橋（1987）p. 15）という。家族の解体に関する氏の考えは以下のとおりである（高橋（1984）p. 43・pp. 172－199参照）。生活の社会化・個人化によって，家族は大きく変化した。その変化とは，家族の機能の縮小，社会保障への依存度の増大，個々の家族員の個人生活の分化，価値や規範の多様化・弱体化である。これらの変化によって生じることの中で，氏は家族内の役割分担の相対化・曖昧化に注目する。人々が個人単位の生活を送ることが可能になったこと（個人生活の分化）の背景に，家族の機能の縮小や社会保障への依存の進行がある。そして個人生活の分化と価値・規範の多様化・弱体化とは相互に関連し合っており，しかも家族における役割分担の相対化，ひいては親子や父母の区別の曖昧化をもたらしている。これは，家族が家族として存立する意義を弱める方向で作用する。

地域社会の解体に関して高橋氏は次のように述べる（高橋（1984）pp. 200－209）。生活の個人化の中で，「私」中心の生活を追求するという傾向が強い個人生活が拡大し，社会生活からの分化が進んでいる。この社会生活の中には地域生活も含まれている。よって，社会生活からの個人生活の分化は，その帰結の一つとして人々の生活と地域社会との関わりの希薄化をもたらす。すなわち，「生活の個人化とか個人生活と社会生活の分化とかの生活様式の全国的な拡大，すなわち都市化が，『都市』，『農村』のいずれの地域社会をも解体したのである」（高橋（1984）p. 209）。

(15) それに伴って，「人間の社会的形成の特色は，『子どもの大人化』あるいは『大人の子ども化』に求められるようになった」（高橋（1995）p. 322）とし，「モラトリアム」が青年期特有の社会的性格だとする理解から，広く現代人の社会的性格だとする理解へと移行していったことには，こうした状況が関係していると高橋氏はみる。

また氏は，幼少年期の子どもであっても，彼ら・彼女らの購入する商品の高度化・高級化が進んでおり，そ

れは「子どもの商品の大人化」の進行だとする（高橋（1987）p. 13）。また，メディアの発達・享受による「青少年の大人化」も指摘し，メディアによる「コミュニケーションの拡大は，大人のそれとほとんど重なっていて，『子どもの世界の大人化』をともなっている」（高橋（1987）p. 5）と述べている。

(16) 高橋氏によれば，「生活の個人化は，生活の社会化とともに，人々の人間関係の弛緩・希薄化を生み，子供の場合は直接的な生活体験の貧困化も作用して，人間関係の質的な変化（他者との深い関わりや関係の忌避，人間関係のモノ化など）を引き起こしている」（高橋（1996）p. 219）という。

(17) また，高橋氏は次のようにも述べている。「家族関係もふくめ，集団生活・共同生活の絆を省略した，いわば相互の『軽い』関係が志向され，一人単位の生活が拡大した（シングルスはもちろん，ディンクスもまた然り）。この変化は，夫婦の関係，親と子の関係，教師と生徒の関係，友人関係，近隣関係等，いずれの関係にも現れた。だから，例えば，大人から子供へ，親から子への伝統・文化の継承といった関係も薄れてしまい，あたかもそれにかわってマニュアルやガイドブック等の情報メディアが比重を増した。当然ながら，家族や地域社会の枠はゆるみ，そのような状況の中で，子供たちは成長することとなった」（高橋（1992a）p. 38）。

(18) 「人間関係の省略」とは，「人間関係の不足や欠如，人間関係の機械化による消失，人間関係の拒否や拒絶，人間関係の間接化や片よりなどを一括して」（高橋（1984）p. 49）指している。

(19) 「実際に，これらの『冷たい』関係の中で，つまり他人にわずらわされることなく，自分の生活における関心を追求しているのも，今日では普通であろう」（高橋（1984）p. 49）。

(20) 1994年の時点で高橋氏は，こうした状況が一層深化していることを示唆している。氏によれば，「今日の人々は，『人づき合いをモノ化』し『自分自身をモノ化』して，葛藤をさける傾向が強い」（高橋（1994a）p. 84）という。つまり，人々の間でそれぞれの生活価値は相容れないのにもかかわらず，もはや対立・葛藤し合うことさえなくなってしまったというのである（高橋（1995）p. 321も参照）。

(21) 高橋氏によれば，共同性感覚は「社会生活において共に生きるという生活感覚」であり，「社会的価値の共有をぬきにしては考えられない」（高橋（1987）p. 11，傍点原文）という。個別性感覚とは「社会的価値を共有しつつも，また同時に，自分の生活価値をも重視するという生活感覚」だが，「私生活化（プラバタイゼーション）にむすびつきやすく，したがって，社会的価値の共有とはしばしば矛盾する傾向をもっている」（高橋（1986）p. 8）という。

(22) 以下にみる高橋氏の論は，氏も委員並びにその行動計画専門部会長を務める第22期東京都青少年問題協議会の中間答申（東京都青少年問題協議会（1997））をもとにしている。同協議会が「第5の生活空間」に注目するようになった一つの理由として，テレクラや「援交（援助交際）」の問題がある。すなわち，「第5の生活空間」には「若者たちと同様に『場』から切り離された大人たちがおり，両者が偶発的に知り合う環境があったことが深く関係している」（同上書）ととらえているのである。

(23) 高橋氏は，以下にあげる，近代における親密な関係性の変容に関するギデンズの指摘に依拠して，今日では，安心感とともに根深い不安感もまた第1次関係に潜むようになっていると解している（高橋（1998）p. 138）。

「今日の人格的な信頼関係が想定する，相手に『心を開くこと』の要求，つまり，相手に何も隠してはならないという命令は，安心感と根深い不安感とを混ぜ合わせていく。人格にたいする信頼は，それ自体がおそらく心理的緊張感の源となるにちがいない，ある程度の自己理解や自己表現を要求する。なぜなら，相互の自己開示は，互酬性や支援の要求と一体化しているからである。しかし，両者は多くの場合並立しえないものである。苦悩や欲求不満は，保護と支援の提供者としての他者にたいする人格的信頼の要求と緊密にからみ合っているのである」（Giddens（1990＝1993）pp. 178－179）。

私はそれを次のように解釈する。第1次関係が成り立ち，維持されるには相互に相手に信頼されなければならない。それには，互いに相手に対して心を開かなければならない。信頼要求と自己開示が対になっているの

である。その自己開示が常に抵抗感なくすんなりいくとは限らない。自己開示は，その裏側に，そうしないと信頼してもらえなくなるという思い（あるいは恐れ）が程度の差こそあれ張り付いていることもあって，心を開かねばならないという強迫的な色彩を，濃淡の違いはあれ帯びる傾向を持つようになっている。そのため，自己開示することに何らかの抵抗感を覚えることや，意に沿わぬことも時にはあり，場合によっては緊張感や苦痛を伴う。それだけではない。そうまでして自己を相手に開示したところで，それで以て相手から信頼を得ることが完全に保障されたとはならない。つまり，相手に隠し立てなく心を開けば，相手は自分を必ず信頼するようになる，とは限らないのである。相手が自分を信頼するかということは可能性の問題であって，必然性の位相にはない。相手が自分を信頼しなくなる可能性を完全に排除することはできない。それ故，信頼を得ることができるのだろうか，あるいは今のところは信頼を得ているが，これからもそうした状態が続くのだろうかという不安感がつきまとうこととなる。(Giddens（1990＝1993）pp. 142－155・p. 177も参照)。

(24) 浅野氏は，高橋氏をリーダーとする青少年研究会のメンバーである。高橋氏は，この研究会を通して，出版される前の浅野氏のこの論文に接したものを思われる。

(25) この調査及びその結果をもとにした研究（高橋勇悦監修（1995)，富田他編（1999)）は，上記の青少年研究会によって行なわれた。

(26) 先述した，今日における人間の社会的形成が多元的かつ不連続な集団帰属・接触の中で展開しているという状況に，「適応」するほど多重人格化の傾向が強まると高橋氏はいう（高橋（1998）p. 140)。

(27) 高橋氏は，ネットワーク型住民活動にはコミュニティ形成にとどまらず，それを通して更に社会改変へと連鎖する可能性があるとする。都市型社会は，①日常的な生活世界である「私秘化された世界」(「生活の個人化」の極)，②システム合理性の「制度化された世界」(「生活の社会化」の極）の二極に分化しているとした上で，ボランタリー・アソシエーションとしてのボランティア活動は①から②へ対抗的に媒介する役割を果たすと述べている（高橋（1996）pp. 220－224)。都市社会には，家族から外部化された諸機能を引き受ける専門機関が集積しており，人々はそれらを共通に利用している。その意味では，都市社会は「生活共同体」であり，②の「制度化された世界」がそれに当たる。高橋氏において，「対抗的に媒介する」とは，ボランティア活動がこうした「生活の社会化」の世界としての「生活共同体」に対して，「生活の個人化」の世界から，「もうひとつの生活共同体」を提起することを意味している。それは，渡戸一郎氏がいうように「〈生活世界〉から〈システム〉を『撃つ』ことを通して，〈システム〉を作り変えていくことを意味する」(渡戸（1995）pp. 49－50)と高橋氏は考える（高橋（1996）p. 221)。高橋（1995）p. 315も参照のこと。

〈引用文献〉

- 浅野智彦（1999)「親密性の新しい形へ」，富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界――若者たちの東京・神戸90's［展開編］』恒星社厚生閣。
- Axelrod, Morris (1956), "Urban Structure and Social Participation", *American Sociological Review,* vol. 21（鈴木広訳（1978)「都市構造と集団参加」，同編訳『都市化の社会学〔増補〕』誠信書房)．
- 藤村正之（1999)「通過駅でも永住地でもなく――世代文化としての青年文化」，富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界――若者たちの東京・神戸90's［展開編］』恒星社厚生閣。
- Giddens, Anthony (1990), *The Consequences of Modernity,* Polity Press（松尾精文・小幡正敏訳（1993)『近代とはいかなる時代か？――モダニティの帰結』而立書房)．
- 井上　俊（1971)「青年の文化と生活意識」，『社会学評論』第22巻第２号。
- 井上　俊（1972)「離脱の文化――〈反〉と〈脱〉の心理と論理」，『別冊経済評論』第９号，日本評論社。
- 神島二郎（1971)『文明の考現学――〈原日本〉を求めて』東京大学出版会。

- 前田信彦（1993）「都市におけるパーソナル・コミュニティの形成――ソーシャル・ネットワーク論からの分析」,『日本労働研究機構研究紀要』第6号。
- 前田信彦（1995）「現代日本人のパーソナル・ネットワーク」, 今田幸子・平田周一・前田信彦・岩科志津子『職業と家庭生活に関する全国調査報告書』（調査研究報告書 No. 74）日本労働研究機構。
- 松原治郎（1971）『現代の青年――変動期における意識と行動』中公新書。
- 宮島喬編（1980）『現代と疎外』（現代のエスプリ第153号）至文堂。
- 森岡清志（1993）「社会的ネットワーク」, 森岡清美・塩原勉・本間康平編集代表『新社会学辞典』有斐閣。
- 森岡清志（1995）「都市社会とパーソナル・ネットワーク――パーソナル・ネットワーク論の成果と課題」,『都市問題』第86巻9号, 東京市政調査会。
- 森岡清志（1998）「パーソナルネットワーク研究の方法的問題――標本調査と事例調査の検討」, 倉沢進先生退官記念論集刊行会編『都市の社会的世界――倉沢進先生退官記念論集』㈱ＵＴＰ制作センター。
- 大森　彌（1983）「都市論における UR 軸の再検討」,『UP』第132号, 東京大学出版会。
- 大谷信介（1995）『現代都市住民のパーソナル・ネットワーク――北米都市理論の日本的解読』ミネルヴァ書房。
- 奥田道大（1993）『都市型社会のコミュニティ』勁草書房。
- 高橋勇悦（1965）「都市化研究の社会学的方法と課題」,『都市問題』第56巻第4号。
  ⇨加筆修正の上, 高橋（1969）に所収。
- 高橋勇悦（1968a）「ルイス・ワースの都市社会学」,『明治学院論叢』第136号。
  ⇨高橋（1969）に再録。
- 高橋勇悦（1968b）「都市化と社会変動」, 東北社会学研究会編『社会学研究』第29号。
  ⇨高橋（1969）に再録。
- 高橋勇悦（1969）『現代都市の社会学』誠信書房。
- 高橋勇悦（1970a）「都市をどうとらえるか――アーバニズムの理論」, 佐藤毅他『社会学を学ぶ』有斐閣。
  ⇨高橋（1993a）に再録。
- 高橋勇悦（1970b）「都会人とその故郷」,『明治学院論叢　社会学・社会福祉学研究』第26号。
  ⇨高橋（1974a）（1995）に再録。
- 高橋勇悦（1970c）「都市人間論」,『別冊経済評論』第2号, 日本評論社。
  ⇨高橋（1974a）に再録。
- 高橋勇悦（1971）「都市問題と社会変動」, 田代不二男・斎藤吉雄編著『社会福祉と社会変動』誠信書房。
  ⇨高橋（1974a）に再録。
- 高橋勇悦（1972）「都市におけるコミュニティの再建」,『週刊東洋経済』第3653号, 東洋経済新報社。
  ⇨高橋（1974a）（1995）に再録。
- 高橋勇悦（1973a）「生活構造と社会関係」, 倉沢進編『都市社会学』（社会学講座5）, 東京大学出版会。
- 高橋勇悦（1973b）「都市化社会の若者文化――原点喪失とあそび」, 濱島朗編『現代青年論』有斐閣。
  ⇨高橋（1995）に再録。
  ⇨加筆修正の上, 高橋（1974a）に再掲（⇨宮島喬編（1980）に再録）。
- 高橋勇悦（1974a）『都市化の社会心理――日本人の故郷喪失』川島書店。
- 高橋勇悦（1974b）「若者文化と現代家族」,『子どもと家庭』第59号, 日本児童問題調査会。
- 高橋勇悦（1975a）「日本社会の変動とコミュニティ」, 国民生活センター編『現代日本のコミュニティ』川島書店。
- 高橋勇悦（1975b）「家族, 親族, および『さと』」, 奥田道大・副田義也・高橋勇悦『都市化社会と人間』日

本放送出版協会。
⇨高橋（1995）に再録。
• 高橋勇悦（1975c）「都市化社会の社会学――都市社会学の危機と再生」，『社会学評論』第25巻第4号。
⇨高橋勇悦（1993a）に再録。
• 高橋勇悦（1977）「都市化社会と人間」，同編著『テキストブック社会学(5)　地域社会』有斐閣。
⇨高橋（1995）に再録。
• 高橋勇悦（1981）『家郷喪失の時代――新しい地域文化のために』有斐閣。
• 高橋勇悦（1982）「都市文化における同調と競争」，石川晃弘・梅澤正・高橋勇悦・宮島喬『みせかけの中流階級――都市サラリーマンの幸福幻想』有斐閣。
• 高橋勇悦（1984）『都市化社会の生活様式――新しい人間関係を求めて』学文社。
• 高橋勇悦（1985）「都市型社会への移行と生活様式の変化」，日本都市計画学会編『都市計画』第136号。
• 高橋勇悦（1986）「都市型社会のライフスタイル」，あしたの日本を創る協会編『住民活動』第50号。
• 高橋勇悦（1987）「現代都市と青少年の問題状況」，同編『青年そして都市・空間・情報――その危機的状況への対応』恒星社厚生閣。
• 高橋勇悦（1988a）「地域社会」，本間康平他編『社会学概論〔新版〕』有斐閣。
• 高橋勇悦（1988b）「大都市青少年の人間関係の変容――1.5次関係の概念に関する覚え書き」，東北社会学会編『社会学年報』第17号。
⇨高橋（1995）に再録。
• 高橋勇悦（1988c）「新しいコミュニティ形成の活動と組織――まちづくりの新しい動き」，『行政システム研究』1988Ⅱ号，地域行政システム研究所。
• 高橋勇悦（1988d）「豊かな地域生活のイメージ」，『研修のひろば』第52号，特別区職員研修所。
• 高橋勇悦（1989a）「都市型ライフスタイルの変化を読む」，『広告月報』第354号，朝日新聞社。
• 高橋勇悦（1989b）「高齢社会と青少年施策――これまでの専門部会の審議内容から」，『青少年問題研究』第153号，東京都生活文化局。
• 高橋勇悦（1992a）「若者と都市空間」，都市問題研究会編『都市問題研究』第44巻第6号。
⇨高橋（1995）に再録。
• 高橋勇悦（1992b）「コメント――都市における人間関係について」，森岡清志・松本康編『都市社会学のフロンティア2　生活・関係・文化』日本評論社。
• 高橋勇悦（1993a）『都市社会論の展開』学文社。
• 高橋勇悦（1993b）「青少年・高齢者・コミュニティ――研究テーマ（1985～1993）に関する覚え書き」，『総合都市研究』第50号，東京都立大学都市研究センター。
⇨高橋（1995）に再録。
• 高橋勇悦（1994a）「都市家族と人間関係の変容について――人間形成の問題にむけて」東北社会学研究会編『社会学研究』第61号。
⇨高橋（1995）に再録。
• 高橋勇悦（1994b）「地域社会への期待と現実」，森岡清志・中林一樹編『変容する高齢者像――大都市高齢者のライフスタイル』日本評論社。
⇨高橋（1995）に再録。
• 高橋勇悦（1995）『東京人の研究――都市住民とコミュニティ』恒星社厚生閣。
• 高橋勇悦（1996）「都市的生活様式とボランティア社会」，高橋勇悦・高萩盾男編『高齢化とボランティア社会』

弘文堂。

- 高橋勇悦（1998）「1.5次関係，多重人格，ネットワーク――都市的人間関係論覚書」，倉沢進先生退官記念論集刊行会編『都市の社会的世界――倉沢進先生退官記念論集』㈱UTP制作センター。
- 高橋勇悦（1999）「大都市の青少年問題について」，東北社会学研究会編『社会学研究』新明正道先生生誕百年特別号。
- 高橋勇悦監修（1995）（川崎賢一・芳賀学・小川博司編）『都市青年の意識と行動――若者たちの東京・神戸90's［分析編］』恒星社厚生閣。
- 玉野和志（1995）「ネットワーク分析と社会層の視点」，『都市問題』第86巻第9号，東京市政調査会。
- 東京都青少年問題協議会（1997）『大人も青少年も自立した社会づくり――青少年の自立と社会活動のための行動プラン（青少年健全育成のための東京都行動計画）策定に当たっての基本的考え方について（第22期東京都青少年問題協議会中間答申）』東京都生活文化局。
- 富田英典・藤村正之編（1999）『みんなぼっちの世界――若者たちの東京・神戸90's［展開編］』恒星社厚生閣。
- 渡戸一郎（1995）「転換期の都市型社会とボランタリズム」，都市問題研究会編『都市問題研究』第47巻第8号。
- Wirth, Louis (1938),"Urbanism as a Way of Life", *American Journal of Sociology*., vol. 44（高橋勇悦（1965）「生活様式としてのアーバニズム」，鈴木広編訳（1965）『都市化の社会学』誠信書房）.